

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

第五部

朝霞駐屯地から
オーストラリア・メルボルンへ

防衛医大第三内科で内分泌・糖尿病の専門研修を終えた時点で、①防衛医大で研究科生として研鑽し学位を取得すること、②海外留学で見聞を広めること、という二つの可能性がありました。私は後者を目指しました。医局からは初めての海外留学となるため当時教授の永田先生が母校東大の尾形教授に相談して下さい、メルボルン大学セントビンセント研究所のマーチン教授の下に留学することを勧めて下さいました。マーチン先生に面談し、留学の諸条件を整えるため、フランス・ニースの国際内分泌会議に参加することとしました。せっかく海外に行くのだからと、妻雅代のお母さんをお願いして雄樹・貴美子(当時4歳と1歳ぐらいでしょうか)とパリに行き、ルーブル博物館



の隣のホテルで数日パリ観光してからニースへと向かいました。国際会議では「癌と骨転移」

の話題をポスター展示にて発表し、その場でマーチン教授とメルボルン留学に必要な防衛庁提出書類を頂けるようお願いしました。留学の諸準備をしている最中に、防衛医大ラグビー部先輩で東京医大耳鼻科にて勤務されていた河野先生(現東京医大教授)もメルボルンのEye and Ear Hospitalに留学することが判明し、先に河野先生がメルボルンに留学し、その近くに家を借りることを相談しました。

留学前は小手指から陸上自衛隊朝霞駐屯地に通勤し、駐屯地隊員の健康管理などの業務を実施。夜間などの空いた時間には、防衛医大研究室でマウスの破骨細胞培養システムの樹立法(現並木病院赤津先生が昭和医大での国内留学にて開発されました)を修得し、メルボルンではこの実験系を用いてカルシトニン受容体の制御機構を研究することを模索してりました。



ホームパーティ(研究室の皆さんと)

さて実際の留学に際しては、購入していたマンションを売却、オーストラリア留学ビザの申請、家族のワクチン接種証明、現地にて日本円で支給された防衛省給与を下ろせる銀行口座開設などいくつかの課題がありました。それらも無事に済ませ1993年10月から2年間という期限付きでメルボルンに出立しました。先に現地で生活されていた河野先生に空港まで迎えに来て頂き、皆様の歓待を受け、数日ご厄介になった後、先生宅から近いメルボルン郊外グレン・ワーバリーの一軒家を借りました。一生に一度の海外生活だからとプール付きの家を借りましたが、当時は物価水準も安く円高でもあり、家賃は8-10万円程度でリーズナブルでした(300坪ほどです)。オーストラリアでは敷地の環境整備が義務づけられており、さすがに広すぎ、またプールの維持管理が電気代を含めて大変でしたので、2年目は少し小さめの一軒家に移りました。

自宅からはまれに車で出ることもありましたが、大部分は駅まで自転車あるいは徒歩で向かい、メトロでメルボルン中心部まで移動し、セントパトリック寺院、市議会場を抜けてセントビンセント研究所へ向かうという毎日でした。2年間の留学中には一緒に研究した仲間、メルボルンで暮らす中で知り合った友人や家族、現地の小学校に通学した長男雄樹幼稚園で過ごした長女貴美子の苦労など様々なエピソードがありました。いくつかの代表的写真を今回掲載し、次号でも引き続き当時のメルボルン生活を振り返りたいと思います



自宅でのクリスマス・パーティ